

神奈川県に自生するマサキについて

城 川 四 郎

On the Wild Japanese Spindle Tree Occurring in Kanagawa Prefecture, Japan

Shiro KIGAWA

Summary

The Japanese spindle tree is a familiar for us, but represents many doubtful points in a taxonomical view. For example, we can not know the true scientific name of the level of variety on the tree usually used as the hedge, whose leaves are glossy deep green. It is different from the wild one in some respects that naturally grows near the sea coast of Kanagawa Prefecture.

I have investigated on the Japanese spindle tree in morphological view. Results were as followings:

1. The wild Japanese spindle tree is different from the cultured one in the general form and size of petal.
2. At the stage of flowering, filaments fully curve externally in the cultured one, while, erect in the wild one.
3. *Euonymus japonicus* THUNB. *radicifer* does not always spread the stolon. It shoots the stolon under shade.
4. Specimens being considered as a hybrid (wild one × cultured one) were found in natural condition.

はじめに

マサキは住宅の生垣などに最も普通に栽植されている樹種であり、また北海道から九州に至る海岸に普通に生えるとされている。しかし、住宅の生垣や目隠用に使われているマサキは葉が深緑色の光沢が強い種類で、神奈川県海岸には決して自生していない。

自生のマサキは葉がやや粉緑色で光沢が鈍く、三浦半島の畑の境界樹などに利用されているが、住宅の生垣などに栽植されているものとは明らかに違う。自生状態を観察すると、匍匐枝を出している個体もあるが、多くは匍匐枝を出していない。匍匐枝の有無によって taxon を別にするものか否か判然としない。マサキの変種レベルでの分類には疑問が多く再検討が必要であると思われるが、今回は神奈川県内の自生マサキの調査を行って若干の知見を得たので報告する。

1. 神奈川県に自生するマサキの分類学的考察

マサキには多くの変種、品種があるが特に斑入りや葉形の著しく変化した園芸品を除けば次のようなものが挙げられる。

Euonymus japonicus THUNB.

var. <i>japonicus</i>	マサキ
f. <i>rugosus</i> (NAKAI) HARA	ウチダシマサキ
f. <i>obovatus</i> (NAKAI) Suimoto	ボウシュマサキ
var. <i>longifolia</i> NAKAI	ナガバマサキ
var. <i>macrophyllus</i> REGEL	オオバマサキ
var. <i>radicifer</i> NAKAI	ツルオオバマサキ

以上のうち f. *rugosus* は伊豆, f. *obovatus* は千葉, var. *longifolia* は四国, var. *radicifer* は関東南部～東海, var. *japonicus* は全国に分布するとされている。var. *macrophyllus* は文献上その分布域が明確ではない。

神奈川県自生マサキには明らかに蔓を出すものがある。その形態的特徴は var. *radicifer* にあたる。var. *radicifer* に関する記載 (NAKAI, 1927) は非常に簡潔で「枝は太く、葉は広くて厚く、var. *macrophyllus* に似ているが茎の基部から根を出す匍匐枝を伸ばす」と述べている。神奈川県自生マサキの蔓を出している個体は確かにこれに該当するが、私の観察では蔓を出している個体と出していない個体とは生育地の日照条件の違いによるもので、taxon の違いではないように思われる。杉本 (1961) は日本樹木総検索誌で本種について「しばしば半蔓状の匍匐枝を生ずる」と記し、「しばしば」の語句を入れて枝を出すことが必ずしも常態ではないことをうかがわせている。

この var. *radicifer* ツルオオバマサキの蔓を出す特性が、筆者が前記したような条件下でのみ示されるものであれば、蔓を出さない近似種との識別は標本ではもちろん生育現場でも至難であるに違いない。分類上の混乱は不可避となろう。

E. japonicus THUNB. について日本植生便覧 (宮脇・奥田, 1978) は海岸の風衝断崖地に生えると記している。日本植物誌 (大井, 1978) は *E. japonicus* THUNB. が海岸に普通に生え、また最も普通に栽植されると述べている。恐らくこの2つの文献の *E. japonicus* THUNB. はそれぞれ変種レベルで異なった種類を指しているに違いない。

前者は神奈川県海岸に見られる var. *radicifer* を指し、後者が var. *japonicus* を指すものと思われる。しかし、最も普通に栽培されているマサキは神奈川県海岸には自生していないから、その分布域に疑問が残る。ここにも分類上の混乱がある。

マサキの苞は貧弱な鱗片状で花序が伸び出た段階で脱落し、開花時にはすでにないのが普通である。久内 (1965) は苞が花梗上に対生しているものを相州沿岸でたびたび採り、それを *E. japonicus* THUNB. f. *bracteatus* NAKAI ハナマサキにあたると報告している。これに該当するものは長谷川の三浦海岸昆沙門海岸の標本 (1982) が神奈川県立博物館に収納されており、1987年、筆者も剣ヶ崎で確認し (Fig. 1, Fig. 2), 大場達之は1つの株で枝により苞の宿存、脱落の混在も見ている。

さて、苞の宿存変異はマサキのどの種類にも現われる可能性があるが、中井氏が上記学名を手記したタイプ標本は江の島産のものであったという。それを var. *radicifer* の品種として報告していないということは var. *radicifer* のタイプローカルティである江の島に var. *jap-*

Fig. 1 苞が葉状に発達宿存する *Euonymus japonicus*
THUNB. f. *bracteatus* NAKAI ハナマサ.

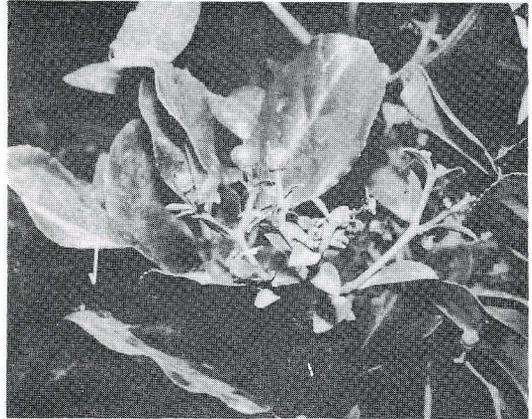
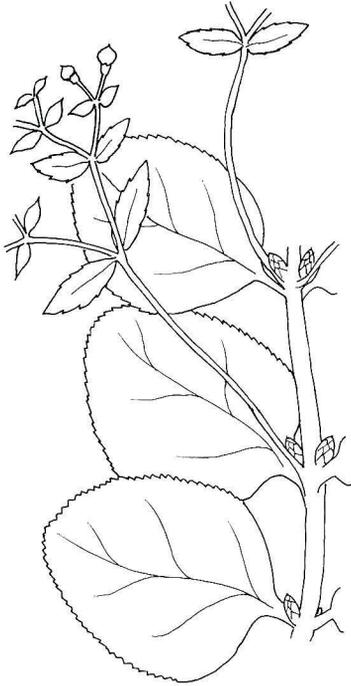


Fig. 2 *Euonymus japonicus* THUNB. f. *bracteatus*
NAKAI ハナマサキ, 三浦半島剣ヶ崎. Aug. 22
'87.

onicus の分布もあるとされたものであろう。

この学名を追認された久内氏も同じ認識であったように思われる。はたして両変種が混在しているものであろうか、大変疑わしい。Var. *radicifer* は前述したように var. *macrophyllus* に似ているが蔓を出す点が違うという。したがって蔓を出していないものが別の taxon だとすれば、それは var. *japonicus* ではなく var. *macrophyllus* に近いものでなければならない。

2. 神奈川県における自生マサキの生育地

神奈川県におけるマサキの生育地は三浦半島から真鶴半島にかけての海岸線で、海食崖を持つ地域である。

マサキは海食崖上縁の風化部分や海食崖が全体的にやや風化した急斜面、あるいは海食崖が二段状になったテラス部分や海食崖の最下部がなだらかに波食棚に移行する斜面部分に限って生育している。すなわち、神奈川県自生マサキの生育地は潮風の影響を最も強く受け、地形的にも不安定で高木類の生育の困難な臨海風衝断崖地である (Fig. 3)。

これらの環境で群落を構成している植物にはトベラ、シロダモ、オオバイボタ、イヌビワ、カラスザンショウ、カジイチゴ、マルバグミ、マルバアキグミ、ヤツデ、テリハノイバラ、テリハノブドウ、ハマサオトメカズラ、ラセイタソウ、ハマボッサ、ボタンボウフウ、イソギク、オニヤブソテツ、コモチシダなどがあり、最も競合している相手はトベラである。

3. 神奈川県に自生するマサキの形態

普通に栽植されているマサキに較べて、自生のマサキは枝が太く、葉は大きく、円い傾向が



Fig. 3 海食崖の風化した急斜面に発達した *Euonymus japonicus* THUNB. var. *radicifer* ツルオオバマサキ群落, 三浦半島剣ヶ崎, Aug. 22 '87.

あり、より厚質で光沢は鈍く、やや黄緑色又は粉緑色の色調を帯びる。葉の大きさや形は株により、また枝により変化が多い。特に顕著なことは下部の枝が斜上せず横に伸びることである。やや垂れぎみに伸びてから弓状に上向することも多い。茎の基部は根際から出た枝が分枝して低く走向し、何本も錯綜している状況になる。そして、日照条件が良ければ、地上を匍匐せず斜上してそれぞれの空間を占有する。

海食崖の上縁に生育する場合、枝は崖に沿って垂れるように伸びて枝先は弓状に斜上する (Fig. 4, Fig. 5)。

海崖の下部でかなり風化の進んだ緩い斜面に生育する場合ではクロマツ、シロダモ、タブ、オオバイボタなどがやや安定的に生育してそれらの樹冠が日照を阻害する。マサキの基部の枝の一部は蔓となって長く地上を這い、発根しつつ伸びて日照空間を求め枝の先端は上向する (Fig. 6, Fig. 7)。

海崖の下部から波食棚にかけての岩盤の多い、緩い斜面に生育する場合、下枝も横に伸びつつ斜上してサツキ型の樹形となる。

花序は6月、葉腋より出てやや密な集散花序を作るが栽培種の花序は普通、葉よりも短い (Fig. 9) のに対し自生種は葉よりも長く伸びる傾向が強い (Fig. 10)。花は4数からなり栽培種が径6~8mmであるのに対し自生種は10~12mmで大きい。萼片は半円形全縁で、栽培種の花弁はほぼ円形か短楕円形である (Fig. 8B) のに対し自生種は長楕円形 (Fig. 8A) を示すことが多い。花弁の先端周縁は薄片状となり、花弁中央部は高まる。

雄蕊について、大場達之は開花後も斜立したまま (Fig. 8A) で変化のないものと、開花して間もなく花糸を屈曲して葯を花弁の間に垂れる姿態をとる (Fig. 8BC) のものがあることを発見した。フィールドでは自生品が斜立したままで栽培種は屈曲しているように観察された。したがって傾向としては栽培種マサキの花序は短く、花は小さく、花弁は短楕円形で雄蕊は屈曲するのにに対し、自生種マサキは花序が長く、花は大きく、花弁は長楕円形で雄蕊は斜立したまま

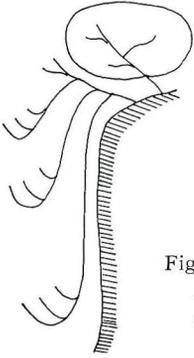


Fig. 4 崖の上は *Pittosporum Tobira* (THUNB.) AITON トベラが優先し, *Euonymus japonicus* THUNB. var. *radicifer* ツルオオバマサキは崖面の空間に枝を伸ばす。

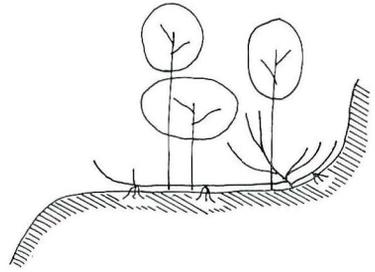


Fig. 6 *Pittosporum Tobira*, *Neolitsea sericea*, *Fagara ailanthoides* などに日照を奪われた, *Euonymus japonicus* var. *radicifer* ツルオオバマサキの枝が発根しつつ地を這う。



Fig. 5 *Euonymus japonicus* THUNB. var. *radicifer* ツルオオバマサキが崖に枝を垂れる初期. 真鶴岬, Ang. 16 '87.

屈曲しないということができる。

しかし、多くの標本を検するとこの傾向に該当しない個体があり、自生種として採集したものの花の一部に雄蕊の屈曲したものを見出したこともあって、この花糸の屈曲が分類群の形質であるかどうか現段階では結論づけることができない。

マサキの結実性は株によってかなり不揃いであるように思われる。このことは雌雄性の分化が多少進行していることを示すのかもしれない。このことと花糸の屈曲が関係していないか疑ってみる価値があるように思う。

4. マサキの自生品と栽植品の間種

真鶴岬先端には観光施設があって栽植品マサキが植えられており、岬東岸は険しい海食崖が海に面していて自生品マサキの分布が多い。そのうち1株は栽植品マサキとの間種であろうと推定されるものがあった。花の大きさ、花卉の形、雄蕊の屈曲、花序の長さ、葉の大きさ、色調、樹形について比較すると次のようである。



Fig. 7 *Euonymus japonicus* var. *radiciper* ツルオオバマサキの匍匐枝. 真鶴岬, Jun. 26 '87.

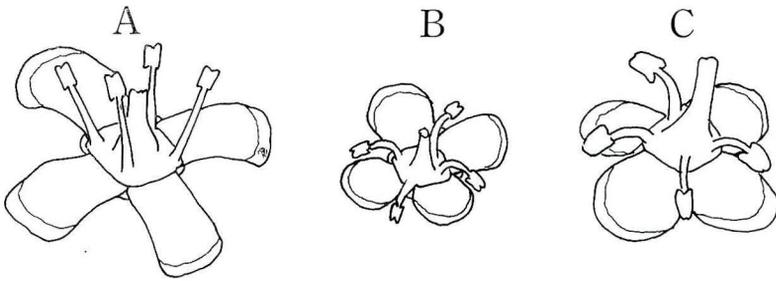


Fig. 8 *Euonymus japonicus* の花. A. 自生品 (var. *radiciper*), B. 栽培品 (var. *japonicus*), C. 間種推定品 (var. *radiciper* × var. *japonicus*).



Fig. 9 *Euonymus japonicus* var. *japonicus* (栽培品) の花枝.



Fig. 10 *Euonymus japonicus* var. *radicifer* (自生品) の花枝.



Fig. 11 Var. *radicifer* × var. *japonicus* (間種) の花枝.

形質	種類	栽 植 種	間 種	自 生 種
花の大きさ (mm)		6 ~ 8	9	10 ~ 12
花弁の形		円形~短楕円形	円 形	長楕円形
花糸の屈曲		+	+	-
花序の長さ		葉と 同 長	葉より長い	葉より長い
葉の大きさ (cm)		2.5~3 × 3~5	4×5.5	3.5~8 × 5~10
光 沢		強 い	鈍 い	鈍 い
下 部 の 枝		斜 上	横 に 伸 び る	横 に 伸 び る

む す び

神奈川県に自生するマサキについて、その生態、形態を通して多少の考察を試みた結果、その生育地は極めて限られた条件にあり、その条件に見事に適応していること、そして適応の具体的形態として基部の枝がある時は斜上し、ある時は垂れ、ある時は地に伏して伸びるものであることを知った。蔓の有無は個体の生態的条件によるもので分類群の相違によるものではない。蔓以外の諸形質を検討すると、神奈川県自生マサキは1つの分類群に属するものと考えてのが妥当であり、それは var. *radicifer* NAKAI ツルオオバマサキ（オオツルマサキ）に該当する。全く蔓を出さない同一分類群の個体にとってこの和名は混乱を招く恐れがあるが、神奈川県の海岸に自生するマサキはすべてツルオオバマサキであるという結論をもってこの報告を閉じたい。この小論をまとめるにあたり、たえずご指導頂いている靱山泰一、高橋秀男、大場達之各先生に深謝申し上げる。

文 献

- 久内 清孝 1965. マサキの一変異品. 植物研究雑誌 40 : 341~342.
 宮脇 昭 1978. 日本植生便覧. 東京, 至文堂.
 NAKAI, T. 1927. Notulae ad Plantas Japoniae & Koreae. XXXIV. *The Botanical Magazine, Tokyo*. 41 : 501-522.
 大井次三郎 1978. 日本植物誌. 東京, 至文堂.
 杉本 順一 1987. 日本樹木総検索誌. 大阪, 六月社.